

『朝から夜へ、夜から朝へ』 寸評

- ・ きわめてまとまりがよくリッチな響きのする作品
- ・ 旋律の推移にむりがなく各楽器の役割分担も明確
- ・ とりわけファゴットのベースラインがなめらかで、和声の興味を強く満足させる
- ・ m.9-12 旋律の受け渡しが対位法の手腕も示す
- ・ タイトルが求めるイメージをコラール風の厚みのある和声で表現

完成度をさらに上げるために

- ・ Cl.とHn.は移調楽器なのでそれぞれ in B^b(orA)と in F で記譜しよう
- ・ 全体がほぼ一貫して同じ厚みを保つので、たとえば3人だけ、独奏等と tutti以外も工夫してみよう
- ・ 吹奏楽器は吹きっぱなしではなくどこか休みをあたえると奏者の負担が減る
- ・ m.3 b.4 Cl.はシのままの方が和声上ぶつからない
- ・ m.4 b.4 Cl.はドミナントの構成音にとどめたらどうだろう (たとえばソ)
- ・ m.9 Fl.全音符でもよいのでは
- ・ アンサンブルであると示すグループ括弧をつけよう→
- ・ m.9-11 たとえば思いきって *p* にするなどディナーミクの工夫もアンサンブルの厚みの変化とともにかんがえてみよう

m.=measure 小節番号のことです。
b.=beat 拍のことです。

とてもよくできました。

持麿 勉